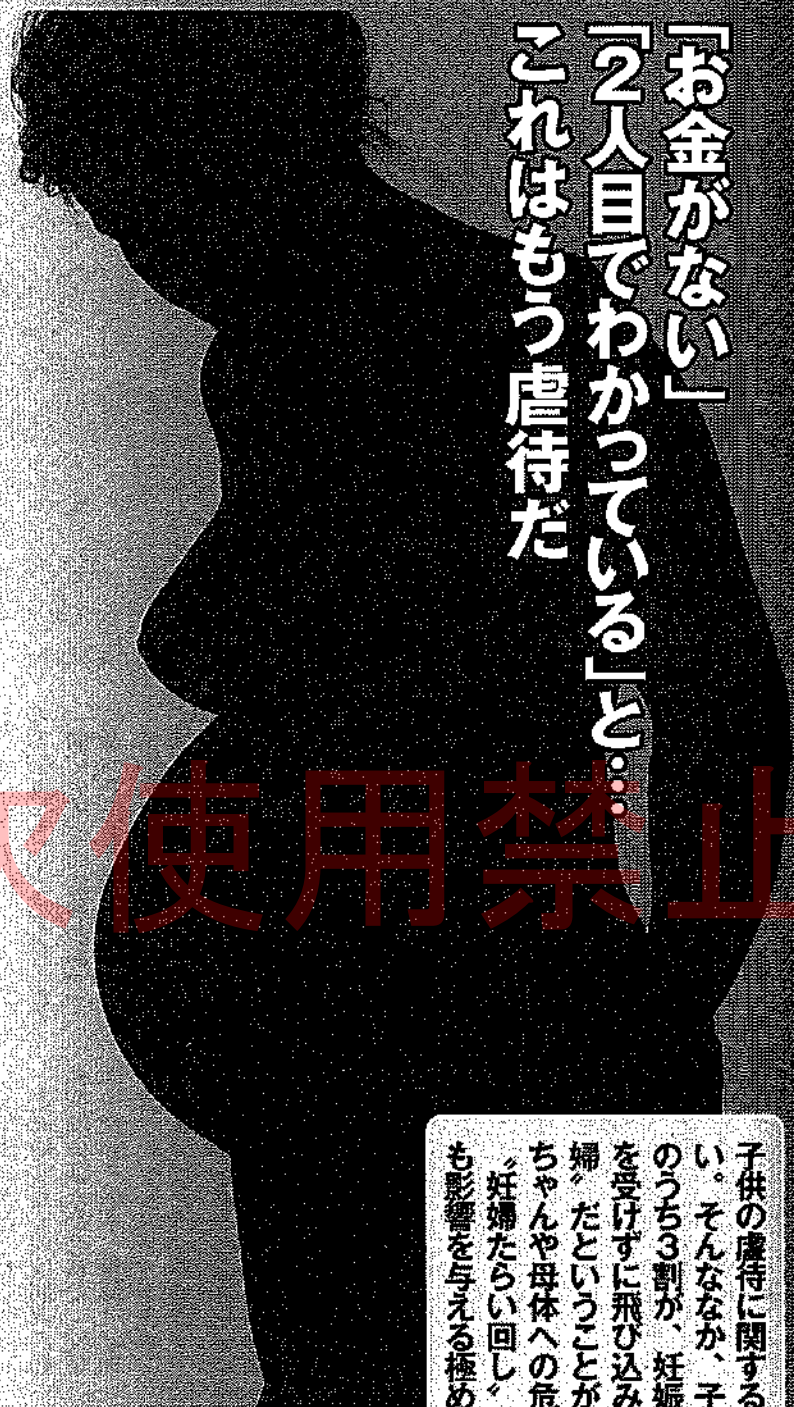


「お金がない」
「2人目でわかっている」と……
これはもう虐待だ



増加する

「めんどうくさいから

病院NO.1の妊婦

取材・監修／医療ジャーナリスト・伊藤筆也



※写真はイメージです。

子供の虐待に関するニュースが後を絶たない。そんななか、子供を虐待死させた母親のうち3割が、妊娠中に病院や医師の健診を受けずに飛び込みで出産する。未受診妊婦。だということがあった。これは、赤ちゃんや母体への危険性はもちろんのこと、妊婦たらい回し、など産科医療の現場にも影響を与える極めて重大な問題である。

児童虐待の認知件数は年間4万件を超え、10年前に比べて4倍に増加した。虐待で命を落とした子供の数も08年度は128人にのぼり、年々増加している。

そんななか、厚生労働省の虐待について検証する委員会の報告書で、驚くべき事実が示された。

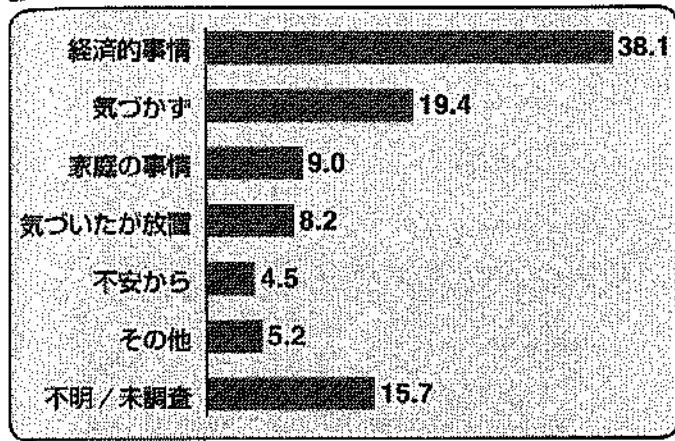
「虐待で亡くなった子供の母親のうち、31%が妊婦健診を受けていない。未受診妊婦。だった」――

* 未受診妊婦とは産婦人科医の健診を全く受けないまま、(あるいは1〜2度しか受診せずに)、出産する人たちだ。

健診は妊婦ならば受けるべきとされているエコーや内診などの妊婦健診のことで、胎児の染色体に異常がないかを調べる「出生前診断」のことではない。通常は妊娠がわかると産婦人科に通院し、母体の健康状態やお腹の赤ちゃんの様子を見る妊婦健診を月に1〜2

5人に1人が未受診の妊婦だった

診察を受けずに産んだ理由は？



調査は日本医科大学(東京都)、国際医療福祉大学病院(栃木県)および山口県、岩手県の両県の病院が未受診のまま子供を産んだ妊婦を対象に実施。

度を受けていく。そして、妊娠15〜20週くらいまでに分娩する医療機関を選ぶ。いまは全国的に産科医やベッド数が不足しているため、多くの医療機関が分娩制限をしている。安全なお産を確保するため、早めに分娩予約をとらなければいけないことが多い。しかし、未受診妊婦はほとんどの場合、分娩予約をとることもなく、産気づくと救急車を呼んで、飛び込み出産してしまふ。

健診を受けない妊婦には2タイプある

彼女たちが健診を受けない理由で最も多いのが「経済的事情」だ(左表参照)。

妊婦健診は保険のきかない自由診療で、通常1回につき3000〜1万円程度かかる。東京にある国立成育医療研究センターの久保隆彦医師が解説する。

「妊婦健診には国と市区町村から補助が出ていますが、その額は市区町村によって異なります、3万〜14万円と大きな格差があります。少ない自治体では健診費用をすべてまかなうことはできません。分娩費用も地方なら40万円程度のところもありますが、東京都内なら100万円近くかかることもあります。少くも少なくありません」



図は妊婦が判明した女性に計14回の妊婦健診を受けることをすすめている。

ない妊婦には大きく分けると2つのタイプがいる。

ひとつは子供が複数いる20代後半〜30代の経産婦だ。1度、2度と出産を経験し、健診中に大きな健康のトラブルがなかったことから、安易な考えを持つようになるという。

「前にも出産の経験があつてわかつているんだから、面倒くさい健診に何度も行く必要はない」

そう話す未受診妊婦もいたという。こうした経産婦のなかには、出産できる病院を確保するために1度だけ健診を受けて、その後健診は受けずに出産時に飛び込むケースもある。

しかし、実際には出産までの間にどんな危険なことが起こるか分からない。「妊娠30週ぐらいのときに1度診ただけの30代の妊婦が救急車で運ばれてきたことがありますが、病院にきたときには肺水腫にかかつていて、血圧が上がって、妊娠高血圧症候群

という重症型になっていた。

定期的な健診を受けていないので状況もわからない。なんと赤ん坊を帝王切開で助け、母親もICUに1週間いまして、一歩間違えれば命にかかわる危険な状況でした」

こう振り返るのは都内の総合病院に勤める医師だ。妊婦は初診時には「(30週になるまで) 妊娠に気がつきませんでした」と悪びれずに話し、その後も1度も健診を受けない未受診妊婦だった。

「結局、分娩費用を1円も払わずになくなつてしまいました。住所がわかつていたので何度も請求しているんですが、いまだに払われていません。それどころか最近、近くの病院でその女性がまた飛び込み出産したという話も聞いています」(前出・医師)

未受診妊婦のうちひとつのタイプは、10代〜20代前半の若い女性だという。10代の未受診妊婦を数多く取材してきたジャーナリストの鈴木大介

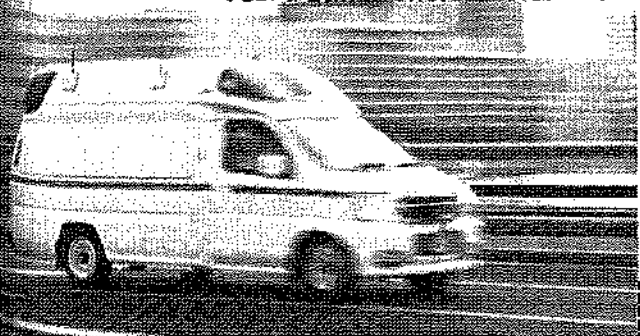
氏はこう話す。

「彼女たちの多くはそもそも虐待や貧困で苦しみ、家を出しているなどの事情があることが多い。家に連れ戻されるのを恐れて自治体などにも相談できず、やむを得ずというケースが多かったですね」

関東地方在住のAさん(17才)も妊婦健診を受けずに、子供を産んだ。妊娠が発覚し中絶を考えたが、20万円近くかかるその費用を払う余裕はない。母には幼いころから虐待を受けており、頼ることは考えなかった。なんとかならないか、お金を工面しようとしたという。

「連絡とれる相手に片っ端からとつたんだけど、みんなギリギリで逃げられた。そのたびに落ち込んで布団から出られないとか普通にあって、そ

東京都は緊急搬送システムを整備。どんな急患でも24時間受け入れる体制を整備したが……



ここ1年東京都内で緊急搬送された妊婦のうち



2年前に東京都で起きた妊婦たらい回し事件で、周産期医療現場の実態が明らかになった。



んなことしてたらすぐ妊娠5か月とかなくて」(Aさん)
もう中絶はできない。しかし、産もうにも病院に行けば妊婦健診、分娩費用を払わなければならない。何より親元に連絡がいくことだけは避けたかった。悩むうち、友人宅で出産

にいたった。

実際、Aさんのようにどうしていいかわからず未受診のまま出産までいってしまうケースも少なくない。

昨年、東京都で緊急搬送された未受診妊婦のうち、2割は10代だった。

予測できない分娩が医療現場を壊す

未受診妊婦の増加、それは私たちにとつても他人事ではない。

東京都で2年前に起きた「妊婦たらい回し事件」。この事件では、脳出血を起こした妊婦が緊急手術のためにかかりつけの病院から他の病院へと搬送先を探したが、8か所の病院から受け入れ拒否されてしまった。何とか受け入れられた先の病院で出産したが、3日後に亡くなってしまった。この事件をきっかけに、東京都では妊婦の緊急搬送システムを新たに構築。リスクの高い妊産婦の受け入れ要請には、都内の3病院が交代で24時間必ず受け入れるようになり、その結果、搬送までの時間は短縮され、妊婦がたらい回しされることはなくなった。

いま日本の周産期医療は世界一のレベルを誇り、乳児死亡率は1000人あたり2.6人と世界一低い。しかしそれは産婦人科医たちが正常に

診療に向きあえる体制があったこそ成り立つものだ。

全国的に産科医やベッド数が不足するなか、医師たちが予測できない未受診妊婦の対応に追われては、しわ寄せはほかの患者にまで及んでしまう。

実際、ここ1年東京都内で妊婦が緊急搬送された435件のうち86件、つまり5人に1人が、未受診妊婦だった。緊急搬送される妊婦が未受診妊婦だった場合、医療現場にはさらなる負担がかかる。未受診妊婦が運ばれてくるとわかった病院は、医師たちがさまざまなリスクを想定し、緊急医療チームを結成しなければならぬ。

健診を受けている妊婦ならば、母体や胎児に異常があれば事前に発見されることが多い。しかし未受診ではどんな病気や感染症が潜んでいるか見当もつかない。C型肝炎、B型肝炎をはじめさまざまなリスクを想定し、血液型・貧血・感染症・肝臓・腎臓など数種類の検査を一度で行わなければならない。まさに時間との勝負だ。

医師たちは防護服や特殊なマスクを身につけ、診療にあたる。「HIVだけは新生児を取り上げるまで感染しているかどうかわからないんです。分娩には出血を伴うため、われわれ医師に感染する可能性もある」(前出・医師)

10月には、未受診妊婦の母親が飛び込み出産した子供がHIVに感染した例が見つかったばかり。妊婦健診などを受け、事前にHIVだとわかっている場合の母子感染率は1%以下といわれている。事前に検査を受けていれば、抗ウイルス剤の投与や帝王切開などによってわが子への感染は防げていたはずだ。

未受診によるいちばんの被害者は生まれてくる新生児ともいえる。

未受診妊婦の出産では、体重が2500g未満の低出生体重児が生まれる割合は健診を受けて出産した妊婦に比べ3倍以上、死産率は2倍以上になる。

また、冒頭のように虐待されやすいというデータもある。前述した2年前のたらい回し事件をきっかけに、いま周産期医療の現場は大きく改善され、重症妊婦を守る体制が整いつつある。しかし、その一方で増えている未受診妊婦の存在。彼女たちにどう対処し、その子供をどうケアしていくか。臨床心理士や福祉のプロなどを入れた専門のケアチームを作り、未受診だとわかった段階で病院と連携し、虐待や悲劇が起きないようにケアしていくことが必要ではないだろうか。生まれてくる子供に罪はない。